
満月の夜

サリー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の夜

【Nコード】

N4034E

【作者名】

サリー

【あらすじ】

10歳の時、施設の前で倒れていたアヤカには、その前の記憶が全く無かった。成長したアヤカが知った真実とは！？

第1話（前書き）

始めまして、サリーです。初めての作品ですがよろしく願いします。軽い性的な描写や暴力的な場面もありますが、苦情はお受けしません。ご了承ください。

第1話

「バンツ！バンツ！バンツ！」

ピストルを発砲する音が暗闇の中に奇妙に良く響いた。

そしてその音はすぐに悲鳴にかわる。

「いやー！！お父さん！！お父さん！！いやよ！！死なないで！！私を一人にしないでー！！！」

『逃げ切れたと思ったのに！どうして！』悲しみと悔しさ、絶望が少女を襲った。

「逃げるんだ！おまえは逃げるんだ！」男は力の限り少女に訴えている。

「おまえは生きるんだ！母さんの為にも…お前は…生きてくれ…」

「おまえに言わなければならぬ事が…母さんは…生きてるんだ…」

男の声はもうすでに力を失っていた。

その目はもう何も見えていないかのように光をなくしていた。

「お父さん！！どうということなの！？お母さんが生きてるの！？」

「す…ま…な…い…………リサ…」

最後の父の言葉だった。

少女はわかっていて。背後から父を殺した人物が二人を見ている事を。

『私も殺されるのだろう。』

少女は不思議だった。自分が殺されると分かっているながらも恐怖を感じなかった。

父を失ったという悲しみと、自分にはもう頼る人は誰もいないという絶望からなのか、不思議に冷静でいられた。

夜空には満月が少女を見守っているかのように輝いていた。『きれい…』そんなことさえ考えていた。

そして少女は立ち上がりゆっくりと振り向いた。

第1話（後書き）

読んで下さり有難うございます。頑張っ更新しますので、応援を
よろしく願います。

第2話

朝の光がカーテンの隙間から差し込んできた。

「ううーん」光が女の顔にかかる。そこには目を見張るような美しい顔があつた。

女の名前は春日アヤカ、ハーフとも取れるような美貌で、髪は長く自然に緩くカールしていた。年齢は25歳。

女は目を覚ましたにも拘らず、中々ベットから出ようとはしなかった。

「頭痛いーやつぱり昨夜は飲みすぎたわ…でも、もうそろそろ起きないと…」。

時計の針は6時30分を指していた。

女は熱いシャワーを浴びる為、バスルームへと向かった。

『由美だったら、だからあれほど言ったのに…あの男は絶対駄目だつて分かっていたわ』

西垣由美はアヤカの唯一の友達であり、家族のような存在でもあった。年齢はアヤカと同じ25歳。容姿はアヤカほどではないが、由美もそこそこの美人である。その由美から昨日電話があつた。

「アヤカ！聞いて！！和也ったらね、他に女がいたの！信じられる！？もうやってられないわ！！アヤカ、今夜はジャックに来てね！！」そしてアヤカの都合も聞かずに由美からの電話は一方的に切られたのである。

《ジャック》はアヤカと由美のお気に入りのである。とくに由美はそのオーナーがお気に入り。店はカウンター席が十席ほどの小さな店だが、ごちゃごちゃした感じが全く無く、モダンでシンブルな造りになっていた。オーナーのセンスが伺える。

オーナーは年齢など聞いた事はないが30歳前半くらいだろう、容姿はモデルだと言っても誰も疑わない。そのくせ体つきはがっしりとした感じである。そしていつも無口で、話かけるとたまに見せる

笑顔はハツとするほど素敵だが、なぜかアヤカにはその笑顔の裏には影があるように思えた。

そのジャックで昨晩は由美に付き合っただけ飲んだのである。やけくそになっている由美に付き合ったのだ、飲みすぎても無理はない。

熱いシャワーを浴びて大分すっきりしたアヤカは、コーヒーを入れ飲みほした後、髪を乾かしてから軽くメイクをし、着替えて仕事へ向かった。

アヤカは電車で二駅ほどの所にあるデパートのおもちゃ売り場で働いている。アヤカは子供が大好きだ。そしておもちゃ売り場にはよく家族づれのお客さんが来る。親が子供を見て幸せそうな顔をする。そして子供もまた親を見て幸せそうな笑顔を作るのだ。アヤカはそんな姿を見るのが大好きだった。なんだかこちらまで幸せな気分になれる。

アヤカには家族はいない。アヤカは施設で育てられた孤児だ。10歳の頃施設の前で倒れていた所を助けられた。それからアヤカは三日間眠りっぱなしだったそうだ。アヤカにはその前の記憶はない。

医者はいよいよショックの為に記憶喪失だと言い、記憶は戻るかどうか判断が出来ないと言ったそうだ。

アヤカの素性を調べる手がかりが何もなく、アヤカは高校を卒業するまでそこで住んでいた。施設での暮らしは他の子供に比べれば不便な事はあるかもしれないが、アヤカは不満を持った事は一度もなかった。そこで一緒に住んでいた、いわゆる母親がわりである先生達は皆とても良くしてくれたと思う。特に院長である斉藤和美先生は本当に優しくしてくれた。和美先生はアヤカが施設に居た最後の年に、40歳になったばかりだった。和美先生は独身だった。アヤカは和美先生とたまに行くショッピングが大好きだった。もちろん施設での生活で嫌な事もあったが、そんなことは小さな事だと思えた。記憶のないアヤカに名前をつけてくれたのも和美先生だった。だがアヤカが大きくなるにつれ、その美貌のせいで随分大変な思いをするようになってきた。施設には30人近くの子供達が住んでい

だが、もちろん女の子ばかりではなく男の子も住んでいた。部屋こそ違うものの、一つ屋根の下に住んでいるのだ。年頃になるとアヤカを取り合う男の子達のいざこざが絶えなくなってきた。その事は先生たちの頭を痛めるのには十分な出来事だった。ある時決定的な事件が起きた。いつものようにいざこざを起こしていた男の子達のケンカがエスクレートし、止めに入った先生を誰かが思いつきり殴って大怪我を負わせてしまったのだ。そしてアヤカは決心した。『ここを出て行こう。それしかない』。そしてアヤカは置手紙を残し、8年間お世話になったこの家を出て行ったのだ。

もともと孤児だったアヤカを探す者は誰もいなかった。ただ、和美先生の事だけは心が痛んだ。

行く場所がなかったアヤカは、高校で知り合った親友を頼って行った。その親友は理由があつてすでに一人暮らしをしていたのもあつて、アヤカの突然の押しかけにも嫌な顔一つせずに対応してくれた。そして好きなだけここに居ればいいとまで言うてくれた。それが由美であつた。アヤカはすぐに仕事を探し必死な思いでお金を貯めていった。そして2年間由美の所で世話になり、大分貯金も出来たアヤカはようやくアパートを借りる事ができた。

アヤカにとっては初めての自分だけの世界だった。

第3話

その日はなぜかとても忙しかった。こんなに一日に沢山の人がおもちゃを買うの？と驚くほどだった。アヤカがこのデパートのおもちゃ売り場で勤め始めてもう3年になるが、クリスマスでもないのにこれほど忙しいのは滅多に無かった。

「今日は凄いな。おもちゃ売り場がクリスマス前でもないのにこんなに混雑した事ってあったっけ？」と男がアヤカに話しかけてきた。男の名前は神崎信二といい、2年前からアヤカと同僚である。歳はアヤカより二つ上の27歳だ。背が高く切れ長のその目はとても綺麗だと女でも思う。アヤカは神崎がなぜおもちゃ売り場なんか勤めているのか不思議でならなかった。デパートの中にはいくつもの店があるが、神崎はあえておもちゃ売り場を希望してきたと聞いた事がある。

神崎はいつでもアヤカにやさしい。同じ職場の同僚達に時々嫌味を言われるくらいだ。「美人は得よね、どんな男にもチャホヤされるのだから、ほんつと鼻にかけて嫌ねー！！」鼻にかけてなんていない、反対にアス力はこの容姿が時々嫌になる。女達には嫌味を言われ、男達は見た目だけで近寄って来て下心丸見えなのだ。もう嫌になる。美人が得だとは限らない。でも、神崎だけは何か他の男達とは違った。

確かにアヤカには本当に良くしてくれる。でもその目に下心があるようには見えない。アヤカだけではなく皆にやさしいし、いつも笑顔でお客様にもとても親切なのだ。そういえば、アヤカは神崎が怒っているのを一度も見た事が無い。

「本当にね、今日はどうしちゃったのかしら」とアヤカは応えた。

「こんなに働かされた日は飲まなきゃやってられないよ！今日、帰りどっかによつて行かない？」

神崎が本気で愚痴っていない事くらいアヤカには分かっている。神

崎はそんな男ではない。

最近神崎とはたまに食事を共にするまでの仲になった。仲と言っても男女の仲ではない。仲良しの同僚としてアヤ力はたまに神崎に誘われる事があった。

「いいわよ、じゃあ帰りは駅で待ち合わせね」

「オッケー」

神崎と食事を終えて帰宅途中、後もう少しでアヤ力のアパートだという時、誰かの視線をアヤ力は背中にした。アヤ力は振り向いた。だがそこには誰もいなかった。

『今のは何？確かに誰かの気配を感じたのに…もしかしてストーカー？やっぱり神崎さんの申し出を断るべきではなかったのかも…』
神崎は家まで送ると言ってくれたのだが、アヤ力が神崎を気遣い申し出を断ったのだ。

アヤ力は急いでアパートに入って行った。

その夜アヤ力はなぜだか分からないが、なかなか寝付く事が出来なかった。照明は付けずにベッドから起き上がったアヤ力は、目を凝らし時計を見た。その針は午前三時を過ぎた所を指していた。外の空気が吸いたくなり、窓を開けるためカーテンを少し引いた。何気なしに見た外の光景にアヤ力の目がある所で止まってしまった。初めは暗くてよく見えなかったが、目が慣れてくるとだんだんとその光景が何なのか見えてきたのだ。「はあっ!？」アヤ力は驚きのあまり声を出していた。そこには、人だろうか？アヤ力にも良くわからないが子供に見えた。大人にしては小さすぎる。三人？いやよく見ると五人はいるだろう。こんな時間にアヤ力のアパートの前になぜ子供達がいるのか？それだけではない、その服装だ。皆がそろって奇妙な格好をしていたのだ。全身黒ずくめに、目にはメガネよりももっと大きな何かをかけていたのだ。アヤ力は恐怖を感じた。

なぜならその者達は皆横一列になってアヤ力の方を見ていたのだ!!
『何なの?!?!』アヤ力は夢を見ていると思ったかった。それほ

どその光景は異常だったのだ。

アヤカはすぐにカーテンを引き、ベッドに潜り込み、頭から布団をかぶりながらその異常な光景に震えが止まらなかった。しかし、いつの間にかアヤカは深い眠りについていた。

アヤカは夢を見た。

血だらけの男が何かを叫んでいる！『生きるんだ！生きるんだ！！』そして気が付けばアヤカは逃げていた。必死に何かから逃げていた。そして立ち止まって自分の手に握られている物が見えた。それは血がこびり付いたナイフだった。

『これは何なの！！？いやー！！！！』

「ハア、ハア、ハア、ハア」アヤカは目を覚ました。その体は震えていた。『私は一体どうしたっていうの！？』

とにかく落ち着きたかった。昨夜見た事、夢の事、全て忘れたかった。アヤカは熱いシャワーを浴びる為、バスルームへ向かった。シャワーを浴び終えた頃には少し落ち着いてきた。

『そうよ、きつとあれも夢だったのよ。そうよ…そうよ…』まるで呪文のように自分に言い聞かせていた。

しかし、何かが動き出している事など、アヤカには知る由もなかった。

第4話

その日の日曜日は晴れ渡ったとても気持ちの良い日だった。

アヤカは午後から由美と久しぶりにショッピングなどを楽しむ予定を立てていたので、午前中の内に洗濯や掃除らを終わらす為に忙しくしていた。

その時、アヤカの携帯電話が鳴った。由美からだった。

「アヤカ！ごめん！！今日無理になっちゃった！この埋め合わせは必ずするからごめんね〜！」

「うん。わかった。いいよ、気にしないで！」

正直アヤカはがっかりした。この間の出来事と夢のせいで気分が落ち込んでいたのだ。あれから変わった出来事は今の所ないが、やはり嫌な気分は消える事はないし、十分に用心するようになった。護身用にスタンガンも通信販売で購入済みだ。届くのは何日か先になるが。

アヤカは驚いた。スタンガンというともっと大きな物を想像していたが、思ったよりもコンパクトな物が沢山あるのだ。アヤカは手のひらにすっぽりと収まるタイプを購入した。

「さてと…今日は何をしようかな…」

家に閉じこもっているのは余りにも勿体無いほどの気持ち良い日だった。

でもアヤカは一人で出かけるのはあまり好きではない。とにかく声をかけられるからだ。ナンパはもちろんの事、タレントのスカウトや夜のお仕事のスカウト、時にはファッション雑誌のカメラマンから勝手に写真を取られたりする事もある。誰かと歩いていても同じ事だが、一人で声をかけられるより誰かが一緒の方が心強い。

『やっぱり今日は家で過ごそう』

そんな事を考えていると、突然携帯電話が鳴り出した。

「由美かな…？」

しかし表示する名前は見た事の無い番号だった。無視をするべきか悩んだが、アヤカは電話に応じる事にした。

「はい、もしもし……」

「あっ、あの、すみませんが、これは、春日さんの携帯番号で合っていますよね」

「そうですか……どちらさまですが？」

「あの、俺、神崎だけどアヤカちゃん？」

「びっくりした！神崎さん！？どうやってこの番号わかったの？」

アヤカは驚いた。神崎とはもう何度も食事を共にしているが、いつも仕事帰りという事で電話がかかってきた事など無かったからだ。『でも……どうやって？私、教えたかしら……』

アヤカの携帯番号は由美以外誰も知らないはずだ。

「まあ、俺にはわからない事は無いんだよ」神崎はそう言ったが、アヤカにははぐらかした様に感じた。

「アヤカちゃん、今日、時間ある？もし良かったら映画でもいかない？」

断る理由はアヤカにはもちろんなかった。

映画の後、二人はある高級レストランの個室にいた。神崎が予約を入れていたようだが、正直アヤカは戸惑っていた。レストランでの神崎の振る舞いはまるで常連のようであり、レストランのマネージャーと言う男がわざわざ神崎に挨拶に来たのだ。そして、このレストランのメニューはどれもかなりの高額だということくらいアヤカにもわかる。

デパート勤めとはいえ、おもちゃ売り場の従業員の給料ではとてもじゃないけどこんな高級レストランにそう来られるはずはない。いつもアヤカと一緒に行く所は、居酒屋とかそういったような所だ。しかし、どう見ても神崎はかなりの回数でここに通っているように見える。

「アヤカちゃん、何でも好きな物食べてよ。遠慮はしない事！」

アヤカの胸には疑問が残ったが、今は言われる通り御馳走になろう。この場の雰囲気壊したくなかったのだ。そのような事を考えていると突然神崎が口を開いた。

「俺の給料なんかで大丈夫かって心配しているんだろ？心配なんてしなくて良いから。金ならあるんだ、親父の金だけだね。悪いけどこれ以上はもう言いたくないんだ。」

アヤカは見逃さなかった。そのように語る神崎の目は悲しみに溢れていた。

神崎はいつも明るく笑顔だ。機嫌の悪い所なんて見た事が無い。でも…本当は神崎も心は泣いているのかも知れない。人間とはそんなものだ。どんなに苦しい事があっても悲しい事があっても結局は生きて行かなければいけないのだ。

「アヤカちゃん…？」

気が付けば神崎がアヤカの事を見つめていた。アヤカは胸が高鳴るのを感じた。なぜなら神崎のアヤカを見つめるまなざしはいつもとは確実に違っていたのだ。

「アヤカちゃん、俺は、君の事が好きだ。でも、その気持ちは簡単に言葉で言えるものじゃないんだ。君は俺にとって、本当にかげがえの無い失いたくない存在なんだ。だから、君を困らせるつもりもないし、何かを望んでいる訳でもないんだ。ただ傍にいて君を守りたいんだ。」

「神崎さん…私…」

「ははは、ごめんね、突然驚いただろ？どうしても一度でいいから俺の気持ちを伝えたかった。いいんだ、今言った事は忘れてくれても。」

ちようどその時料理が運ばれてきたのでその話はそれっきりになった。

帰りは神崎が送ってくれると言う申し出を素直に受ける事にした。

「神崎さん、今日は本当に楽しかったわ。有難う。それと…私、今は正直恋愛とかよくわからないの…でも、神崎さんの事は私もとて

も大切に思っているの。あの…上手く言えないんだけど、これから
も仲良くしてほしいの。」

「もちろん！！アヤ力ちゃん…有難う。」

神埼は嬉しそうだった。それを見たアヤ力もとても嬉しかった。

バスタブに浸かりながら、アヤ力は神埼の事を考えていた。

『恋愛か…神埼さんなら幸せにしてくれるんだろうな…』

今までの男の人達に告白された時の気持ちとは明らかに違っていた。
アヤ力は今十分に幸せだった。

アヤ力には10歳から以前の記憶が全く無い。自分が本当は何者で、
親はどうしてアヤ力を捨てたのか、《アヤ力は親に捨てられたと思
っている》一体自分の身に何が起こったのか何一つ分からない。

そしてこの間の奇妙な出来事、あれは何だったのか…

それと…一体神埼のお父様とはどんな人物なのだろう。分かった事
は神埼が相当なお金持ちの家の息子らしい事だ。でも、それならな
ぜ、神埼はおもちゃ売り場なんかで働いているのだろう。分からな
い事だらけだ…

しかし、今のアヤ力にはそんな事はどうでも良くなっていた。

今日レストランで聞いた神埼の言葉だけがアヤ力の耳に優しく響い
ていた。

第5話

今、アヤカはジャックに来ていた。由美から電話があり話したい事があるという。時計の針は午後8時を過ぎていた。

『遅いな』由美ったら…7時半頃には来れるって言っていたのに…』
「彼女遅いですね」

突然ジャックのオーナーに話しかけられ、アヤカはびっくりした。アヤカは彼に話かけられたことなど一度もなかったからだ。由美は彼の事がお気に入りという事で、何かにつけ彼に話かけていたが、いつも彼はただ頷くだけだった。由美からすればそんな無口さも素敵なのだそうだ。

『なんて素敵な声なのかしら…でも、びっくりした。彼は話が出るのね』

あまりにも無口なのでもしかしたら日本語が話せないのかと思ったほどだ。

『こうして見ると本当に素敵な人だわ…』

「彼女、7時半頃までには来れるって言っていたのに…どうしたのかしら…」

「電話、してみたら？」

アヤカはまたびっくりした。『この人は、由美の事が心配なのかしら…もしかして、由美のこと気に入っているのかな？』

「そうね、ちょうど私もそう考えていた所だから。」

そしてアヤカは携帯電話をバッグから取り出し、由美の携帯にかけてみた。

『えっっ！？』アヤカは焦った。

「そんな…この番号は現在使われておりませんって…どういう事？そんなはずはない。もし事情があって番号を変えるような事があっても、アヤカに知らせないはずが無い。」

「アヤカさん、彼女の身に何かあったのかもしれないね。彼女の

家に行ってみましょう」

彼が突然アヤカの名前を口にしたのは驚いた。でもそれは由美との会話を聞いてれば私の名前は知る事はできる。しかしそれよりも驚いたのは彼が由美の家に行こうと言っているのだ。どうしてただの常連客の家に行こうなんて言うのか。

「早くしましょう」そう言って彼は店から出て行こうとしているところだった。

「えっ！？あの、お店の事は…」アヤカが言い終わらない内に彼はもう外に出ていた。

そしていつの間にか店の前に車が止まっていた。彼の車らしい。彼は助手席のドアを開けながら「早く乗って下さい」と言って、自分は運転席の方へ乗り込んだ。

『何の車だろう…何か凄く高そう…動いているのに、車ってこんなに静かなものなのかな…』

車の事は全く分からないアヤカでも何となくすごい車だという事はわかった。

アヤカはもう何が何だか分からなかった。ただ分かる事は彼が由美の家がどこなのか知っているらしいと言う事だ。『私に内緒で付き合っていたのかな…？それよりも、由美、何も無いよね？大丈夫だよね？』

いつの間にか二人は由美のマンションの前にたどり着いていた。綺麗なマンションだ。アヤカのアパートとはえらく違う。

二人は由美の部屋の前まで来た。

アヤカがチャイムをならそうとした時、彼は構わずドアノブに手をかけていた。「ガチャッ」

「開いた…」思わず声が出た。そして二人は部屋の中へ入って行った。

今、アヤカは彼の運転で自分のアパートの前に来ていた。彼が送ってくれたのだ。

「あの…どうもありがとう…」

「仁」

「えっ!？」

「私の名前は仁。そう呼んで下さい。アヤカさん。」

「仁…さん…」

「仁でいい。アヤカさんは何も心配しないで。私にまかせて下さい。これは私の電話番号です。何かあったらすぐに掛けて下さい。必ずです。あなたは何も心配せず今夜はゆっくり休んで下さい」。

そう言つて、仁はアヤカが部屋に入るまで見守ってくれていた。

アヤカは疲れていた。『どうして…由美、何かあったの!？』アヤカには訳が分からなかった。そして、仁という男の事も…彼は何か知っているのではないか…そんな思いがアヤカの脳裏を過ぎった。由美の部屋には何もなかったのだ…何も……

何かが動き出している、何かが…アヤカは夢の中でそうつぶやいていた。

第6話

アヤカは今日とても疲れていた。昨夜は一睡も眠れなかったのだ。

『由美…』アヤカは由美が何も言わず消えてしまった事が信じられないでいる。由美とは高校生の時、学校で知り合って以来唯一アヤカが心から信じられる人間だった。そして、由美もそうだと思っていたのだ。絶対何か事情がある。アヤカは由美が何か事件に巻き込まれたのかもしれないと考えていた。何とかしなくては…。アヤカが施設を出た時、由美はもうすでに一人暮らしをしていた。その時は何か事情があつてとだけ聞いていたのだが、由美の父親が原因だと後で由美が教えてくれた。その父親3年前に亡くなっている。そして由美には母親はいない。頼れる親類も誰もいないのだ。

警察に連絡しようと言ったアヤカを仁は激しく止めていた。そして自分を信じると言っていた。『なぜ！？仁は何か知っているのよ、絶対』

『仁：彼はただのマスターではないのかもしれない…何なの、一体なにが起こっているの！？』

そして、あの晩のアヤカが見たものは一体……

アヤカは警察に言うべきか悩んでいたが、どうせアヤカの見た事は誰も信じてくれないだろう、そう思っていた。

「アヤカちゃん！」

そう考え事をしている時、突然誰かがアヤカの名前を呼んだ。

「アヤカちゃん、どうしたの？考え込んで…大丈夫？」

神埼だった。神埼は爽やかな笑顔でアヤカの顔を覗き込んでいた。

「あつ…神埼さん今日はお休みじゃなかったっけ？」

神埼は何か用事があつて今日休暇を取っていたはずなのだ。

びっくりしたアヤカはもつとまともな答え方をすれば良かったと、少し後悔した。

「そうなんだけど、思ったより用事が早く終わってね、それにアヤ

カちゃんの顔を一日でも見ないと何だか調子がでないんだ。」そう
言って神崎は軽くウインクしてアヤカの頭をポンポンと撫でた。

アヤカは神崎に会えて嬉しかった。今日は神崎に会えないと思って
いた分、余計に嬉しかった。

『苦しい…何だか胸が苦しい…神崎さんに会えてとっても嬉しいは
ずなのに、私、どうしちゃったのかしら…』

アヤカは自分の心の変化に戸惑っていた。

『私…彼の事が好きなのかな……』アヤカは彼に惹かれていつてい
る事に気付き始めていた。

「アヤカちゃん、もうすぐ上がる時間だろ？飯食いに行こうよ、待
ってるからさ」

「うん、わかったわ」

二人はいつもの居酒屋に来ていた。神崎はこの間の高級レストラン
に行こうと言ってくれたのだが、アヤカはこっちの方が気が楽だっ
たのだ。

二人はいつものように他愛の無い話しをしていた。

「良かった、アヤカちゃん、もう俺と話をしてくれなかったらどう
しようかと思ってたんだ。あんな事を突然言ってしまったからね。
君を困らせたんじゃないかと気になっていたんだ。」

「そんな…神崎さんにあんな事を言われて嫌になる女性なんていな
いと思うわ…」

アヤカは不思議だった。なぜ神崎に彼女がいないのか…実際、アヤ
カは神崎の事を2年近く知っているが、彼女がいたのを見た事がな
い。

「そう言ってくれると嬉しいよ。アヤカちゃん、俺は君の事が本当
に大切なんだ、俺で良かったらいつでも君の力になりたいんだ。」
アヤカは嬉しかった。アヤカの事を大切だと言ってくれる…そんな
人がある事にアヤカは幸せを感じていた。

『彼に話してみようか…彼ならきっと信じてくれる』

「あのね、聞いてほしい事があるの…」

アヤカがそう話始めた時、誰かがアヤカを呼んだのだ。

「アヤカさん！」

仁だった。

「仁さん、何でここに？どうしたんですか？」

「さあ、行きましょう」

そう言つて、仁は突然アヤカの腕を取り表へ連れて行つたのだ。

「仁さん！！突然何をするの？私、一人じゃなかったのよ！？」

「知っていますよ、ちゃんとね。あなたは彼に何を言おうとしていたんですか？忠告しておきます。誰も信じてはいけません。あなたは彼の事を何も知らない、彼はあなたが思っているような人間ではない」

「どういう事！？あなたに彼の何が分かるって言うの？あなたの方こそ信用できません！こんな…こんな突然現れて…まさか…私の後を付けていたの！！！？」

「彼を信用してはいけない」仁はまるで機械のように言い続けた。

「ひどい言われようだな、これはこれはライバルが現れたという事かな？アヤカちゃんほどの女性ならそれも覚悟はしていたけれど、こんなふう言われちゃなく俺も黙っていられないね！」

神崎の口調はおどけている様に聞こえた。だがその目は仁がたじろぐ程の迫力ある目で仁を見据えていた。

「アヤカさん、今夜は失礼しますよ。だが、さっき私が言った事は忘れないようにして下さい」

そして仁は神崎にこう言つて静かに去つていった。「あなたとはまた会う事になりそうですね。」

神崎の運転する車の中で、アヤカと神崎は何も語ろうとはしなかった。アヤカのアパートが近づいてきた時、神崎がようやく口を開いた。

「アヤカちゃん、俺を信じてくれ。何があつても俺が君を守る。俺は君の事を心から愛しているんだ…」そう語る神崎の顔は何かに苦

しんでいるかのようにだった。

「神崎さん…私もあなたの事が好きです。でも、私は不安なの、今色々な事に本当に不安なの…」そう言ってアヤカの目からは耐えられなくなった涙がとめどなく流れた。

「アヤカちゃん！俺を信じてくれ！必ず君を守る。君は一人じゃない！君には俺がいる。」

アヤカ…アヤカ…」

そう言いながら神崎はアヤカを力のかぎり抱きしめた。

神崎はアヤカを部屋の前まで送ると言って一緒に車から降りて来た。「アヤカちゃん、何かあったらすぐに俺に連絡するんだ！わかったね！？」神崎は少しきつい口調でアヤカにそう言った後、

「何なら今夜君の所に止まっても良いけど？いつそのこと一緒に住んじゃおうよ！？」とふざけた口調で神崎はアヤカの肩を抱いた。

「神崎さん！！ふざけないで！！」

「ははは、ごめん！冗談だつて！」

アヤカは分かっていた。神崎はわざとアヤカの気持ちを和ませようとしているのだ。

神崎は本当にアヤカ事心配してくれている。アヤカはなぜだか分からないが、心から神崎を信じられる気がした。神崎といると不思議と心が安らぐのだ。何だか懐かしい気持ちにさせられる。

「神崎さん、あのね…話したい事があるの…」

そうアヤカが口を開いた時、

「キイイイイー！！！」

という音と共に一台の車がアヤカと神崎めがけて突っ込んできたのだ！！！！

「危ない！！！」神崎がアヤカをかばう形で二人は道の端へと転がった。

そしてその車はそのまま走り去ってしまった。

「大丈夫か！？」「ええ…大丈夫みたい…」

神埼はアヤカの安全を確認すると車が走り去った暗闇へと激しく視線を送っていた…

「ちっ！動き出したか…」

アヤカの事を心配した神埼が、今日は別の所へ泊まった方がいいと言ったが、アヤカはどこにも行く気にはなれなかった。何かあればすぐに連絡すると言い聞かせ、それでも渋る神埼を半ば強引に帰したのだ。

アヤカは一人になりたかった…

『あの車、わざと私達に向かって来たわ…なぜなの…私達？いいえ、私に向かって来たわ！』

彼がいなかったら今頃……』アヤカは震えていた。

そして、アヤカは聞き逃さなかった。

『ちっ！動き出したか…』そう呟いた神埼の言葉を…

アヤカは目に見えぬ恐怖に怯えていた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034e/>

満月の夜

2010年10月10日18時59分発行